

鹿の話

佐野良二

居間には昼の余熱がまだ残っていて、ときおり網戸越しに流れこむ微風が快かった。夕食に間があるのだが、新井は待ちかねてビールを飲み始めていた。そこへ電話が鳴った。妻が食事の用意をしているので、彼が受話器をとった。

「新井か、おれだ」

いきなり興奮した声が飛びこんできた。声の主は同級生の木村だった。

「おれな、クルマで鹿を撥ねちゃってよ」

「……何だって？」

「鹿よ、角のある鹿。急に草むらから跳び出すもんだから、避ける暇もありやあしないさ」

「……鹿を撥ねたってか」

「おお、そうよ」

「それで、どうした」

「それでよ、右のライトカバーが割れちゃった。ライトはいかれなかったから走るのに支障ないけど」

「それは、まあ、よかったな」

「……で、鹿は道路に引っくり返って、空を蹴とったけど、すぐ動かなくなった。当たりどころが悪かったんだなあ。おれ、前足

持って引っ張ってよ、道路端に隠しておいた。八〇キロくらいある大鹿だぞ」

新井は、木村が鹿を引きずっている様子を思い浮かべた。高校時代にレスリング部で鳴らした木村は、体格がよく力もあった。彼なら、鹿はおろか牛でも引っ張れそうな気がした。

「どうだ、こいつは食いでがあるぞ。森谷を誘ってとりに来いや」
「どこから電話してるんだ」

「ここはいつもの裏道よ、天塩川と名寄川の合流点を越えて左に大きくカーブしたところだ。近くに〈ヘスリップ注意〉の標識がある。おれ、これから稚内に行かなくちゃならんからどうにもならんよ」

「そうか。でも、鹿って、獲って食っちゃあいかんのでないか」
いつかテレビで、鹿の大量密猟が摘発されたニュースを見たことがある。新井はそれを思い出し、気持ちに引っかかるものがあった。

「うん、たしか保護動物のはずだ」

「じゃあ、やばいんでないか」

「事故死の場合はどうなるかな、おれの過失になるのかな。けど、このまま届けなくたって警察が手配するってことはないべ」

「鹿の轢き逃げ犯人なんて聞いたことないな」

「それでよ、おまえらがクルマで走っていて、偶然に死んだ鹿を見つけて拾って来るっちゅうのは罪にならんべ。おれの連絡がなかったことにしてよ」

「ほんとにならんか、木や石だって持って来いば盗伐盗掘ってことだぞ」

「密猟と違うから大したことにならんべ。そのへんは森谷に話してみれ、あいつハンターに知り合いがいるはずだから。もし違反だとしても知らん顔してればわからんさ。……とにかく鹿の肉っ

てうまいぞ。おまえ、食ったことあるべ」

「いや、まだない」

「それじゃあ、いいチャンスだよ。天の恵みだ」

木村は自分で撥ねておいて、都合のいいことを言った。そして鹿を隠した場所や目印を説明した。

「いいか、肉はおれの分も残しておけよ。もつとも、おまえらで一頭分は食いきれんと思うけど」

「わかったよ。一番いいことっておくよ。このさいおまえは鹿肉の生産者だからな」

「そういうことだ、感謝しろ。じゃあな」

そう言っつて木村の電話は切れた。

新井は、まず森谷へ電話をした。森谷は釣り仲間の一人で、ひと月に何度か海釣りに出かける常連だった。鹿となれば魚とは比べものにならない獲物である。電話口へ出た彼は、すぐ応諾した。自分のジープでそっちへ行く、知人のハンターにも連絡して同行する、と言った。

「このごろインスタントしか食つとらんから、少し栄養つけたいと思っつてたんだ」

彼は半年ほど前に妻と別れ、目下のところ独り暮らしだった。

新井は次に弟の慎二へ電話をした。慎二は二〇〇〇CCのワゴンを持っている。あの車なら後ろのドアを開ければ、いかに八〇キロの大鹿でも積めるだろう。慎二は子供の頃から兄の行くところなら、どこでもついて来たがる性分だった。今でも、新井が仲間と釣りや家族でキャンプなどに出かけるとき、決まって弟の運転つきでワゴンを利用していった。

「すぐ行くよ、兄さん」と慎二は喜び勇んで言った。

新井はさっそく釣りに行くときと同じ身仕度をした。ハッチ戸

棚で仕切られた向こう側の台所にいる妻は、電話のやりとりを聞いていて、

「そんなこととして大丈夫なの」と咎める言い方をした。

「大丈夫、四人いりゃあ運べるべ。おまえにも、鹿肉たっぷり食わしてやるよ」

「そんなんじゃない、違反してもいいと思ってるのってこと。私は、危ない橋を渡るのは反対よ」

「また要らねえ口を出す。おまえは、おれが面白がることを見つけてると、決まって水を差すんだからな」

「違うわよ、つまらないことで勤めを棒に振ったりしてもらいたくないの」

「心配いらねえって、……男が肉をとって来る、女がそれを料理する、人間が何千年もやってきたことだ」

「時代が違うでしょ、いまは法律の社会だわ」

「何を知ったふうなことを。そんなものみんな破ってるべ」

「無茶はやめてよ。自分の歳を考えてみて、もう若くはないんだから」

「うるせえっちゅうの！」

最後は一喝になった。妻は「もう……」と言ったきり黙りこみ、鍋の蓋をとって湯気のなかを箸で突いた。新井は居間の鏡に写る自分の姿を見た。額の生え際が後退し、透けてきた髪に白いものが混じっていた。洗いざらしの作業服が似合いすぎて見すばらしく見え、腹立たしい思いがいつまでも消えなかった。

毎日あくせく働き、世間体や立場を考えて、四十五年間、真面目に生きてきたが、ちっともいいことはなかった。自分が求めていたのはこんなつまらない暮らしではないはずだった。この先の人生だって、けっきょく自分を抑えつけ、しがらみに縛られた、単調で平凡な生活が横たわっているだけだろう。それに気づいて

いるのにどうしようもなかった。何もかも面白くなかった。

一番先に家へ来たのは慎二のワゴンだった。黒いワゴンは弟の性格を表わしてピカピカに磨き立てられていた。間もなく森谷が泥だらけのジープでやって来た。助手席に見知らぬ男を乗せていて、それが知り合いのハンターらしかった。森谷が紹介し、男は野々川と名乗った。新井より二つ三つ年上に見えた。

「血抜きをするのに包丁が要りますね」と野々川が言った。

新井は台所へ行って出刃包丁をとった。妻は冷やかな顔をして「何だかすごい恰好ね」と皮肉った。

「逆上して人を刺すようにでも見えるか」と言っつて、彼は一度、刃先を妻のほうに向け、それから居間へ戻つて新聞紙を刃に巻いた。

玄関へ行くと、森谷が靴箱と壁の間から野球のバットを引っ張り出していた。

「何するんだ」

「いや、まだ生きていたら、こいつで息の根とめてやろうと思つてさ」

森谷はバットを振り下ろす仕草をした。

「まるで縄文時代の感覚ですね」

野々川はうまい表現をした。

瀕死の状態の、放っておけば必ず死ぬ鹿を殺しても、やはり密猟と同じ罪になるだろう、と新井は考えた。

ワゴンの助手席に乗った新井は、出刃包丁をダッシュボードの上に置いた。いつものように慎二がハンドルを握り、後ろの席に森谷と野々川が乗りこんだ。道路へ出るとき慎二が、

「血抜きをしても、クルマに血がつくかもしれないな」と言った。

「そうか、シートでもありやあいんだが」

「おれに任せな」と森谷が言った。

ワゴンは森谷の実家へ廻った。彼の両親は町はずれで農業をしており、その古い木造の家へ着くと、彼は納屋に駆けこんだ。ほどなく皺くちやになった透明なものを抱えてやって来た。冬の間、隙間風を遮断するため窓に張るビニールらしく、それをワゴンの後ろに放りこんだ。

「よし、出発だ。きょうはでかい収穫だぞ」

森谷は弾んだ声を出した。釣りに行くときより一段と声が高かった。

木村が稚内へ向かった道路は、農業用に整備された、いわば国道の裏街道だった。行き来するクルマは滅多にない。真つすぐ続く鉛色のアスファルトの両側は見渡すかぎり畑作地で、散在する人家は濃い緑の木々に囲まれていた。遠くに連なる雨竜山脈の稜線が、陽を呑みこんだ西空の余光でくつきり見えた。

「この辺の山に鹿がいるなんて信じられねえなあ」と慎二はいつもの癖で、体を少し斜めにして運転しながら言った。「野兎や狐が道路を横切るのは見たことあるけど、鹿に出食わしたことなんか一回もねえもの」

「どこの世界にもはみ出し者がいるんだよ」

森谷が車窓から腕を出し、風に当てながら言った。何だか自分を弁護しているような口ぶりだった。

「昔は、ここら一带エゾシカの楽園だったらしいですね。松浦武四郎が探検に来たときの話、聞いてますか？」と野々川が尋ねた。みんな知らないふうだった。

「……小高い丘が上がって見渡すと、草原のなかに三町ほど褐色に変色しているところがあったんですと。それで、あれは草が枯れたのかと案内のアイヌに聞いたら、アイヌは物もいわんで弓矢

を持って駆け出し、それからしばらくして、その褐色の草原がパ
ーツと散って緑色になったって」

「へえ、それ、みんな鹿だったわけ。凄いですねえ。それがなんで、
さっぱり居なくなっただんすか」

慎二がバックミラーのなかの野々川に聞いた。

「やっぱり乱獲でないですかねえ。和人が入ってきてから無茶苦
茶にとったから」

「悪いのは和人か。それで、おれたちはその和人の末裔まつえいってわけ
だ」と新井が言った。

「道理で市民はろくでもない奴ばかりだと思った。だから、街が
よくならねえ」と森谷が他人事のように言った。

行く手の左側に白っぽい火葬場の建物が現われた。碎石砂利を
敷いた駐車場に乗用車が数台停まっっていて、喪服を着た黒い人影
があちこちに屯ろしている。

「葬式か。縁起でもない」

火葬場の前を通過するとき、新井が呟いた。

「命あるものは皆死ぬ、自然の摂理だよ。……生きているうちだ
けだぞ、うまいものを食べるのも」と森谷は意に介さなかった。

慎二が頭を右に傾げてハンドルを回した。ワゴンは右へカーブ
して、他の者はみな左側へ体がかしいた。道路はそこから雑木林
に挟まれたので、火葬場はすぐ木々の陰に隠れた。しかし、雑木
林の上にコンクリートの煙突が突き出て見え、先端からうっすら
煙が昇っているようだった。

「鹿は肉もうまいし、皮も角も使える、頭は剥製と、捨てること
ろがないくらい用途があります」と野々川が言った。

「ちよつと聞いておきたいんだけど」と新井が改まった口調で言
った。「鹿の禁猟期間はいつなんですか」

「さあ、私はよくわからないんですが、たしか夏中だめだと思い

ますよ」

「そうですか。……じゃあ、狩猟で獲るんでなく、交通事故で死んだ鹿を見つけて拾って来るっちゅうのはどういうことになりま
すかね」

「さあ、どうなるんでしょうね」

ハンターなら常識とも思われることを何で知らないのか、と新井は疑問を抱いた。すると森谷が「忘れとった」と言った。

「この人、ハンターじゃないんだ。肉屋を経営してる。銃もってる奴に電話したけどいなくてよ、ピンチヒッターで来てもらったんだ」

「なあんだ、そうですか」

「申しわけないですね、私はやつつけたあとが仕事なもんで」
車内に笑い声が湧いた。みんなが笑い終わっても、野々川だけはいつまでも喉が引きつったように笑っていた。

「おれはまだ食ったことがないんだけど、鹿の肉って牛肉に近い味だっちゅいますね。ほんとにそんなにうまいもんすか」

慎二が、今度は答えられそうな質問をした。

「うまいって言いましても、そんな頼っpegが落ちるような味ではなくて、わりと淡泊な傾向ですから、料理しやすいつちゅうこと
ですかね」

「何にして食うと一番うまいすか」

「それぞれ好みがありますが、一般的には鉄板焼きか、すき焼き
ってところですかねえ」

「いやいや刺身もおつなもんだよ。ルイベみたいに凍らしたのを
包丁で薄く切ってさ、それに山葵醬油わさびじょうゆをつけて食ってみな、堪え
られねえから」

森谷が声を高めて言った。

「そうですね、癖のない肉ですから。単純に塩と胡椒こししょうで焼いたの

なんか、あつさりしていいもんですし、一晚味噌に漬けて、焼いて食うのも素朴な味がする。とにかく、さーつと焼くのがコツですわね」

「それが一頭手に入ったとなれば、いろいろにして食えるな」
新井が小刻みにうなずいて言った。

「厚く切ったやつをジューツと焼きながら、冷たい生ビールかうイスキーのロックでやってみろ、たまらんぞ」

森谷はコップを傾ける仕草をした。

「おれ、涎よだれが出てきたわ」

「一頭ちゅうと何キロくらいあるのかな」

「木村は、八〇キロくらいの鹿だと言っとった」

「豚だと体重の六五パーセントは枝肉がとれるっていいんですが、鹿は痩せてますからね、四〇パーセントとれますか。その程度として……三二キロってとこですか」

野々川が専門的な数字を並べるので、みな納得した顔になった。

「この四人じゃあ、幾晩あっても食いきれねえな」

「大丈夫、うちの冷蔵庫は大きいですから、ちゃんと保存しておきますよ」

「木村に片足くらいやらなくちゃならんべな」

「あいつ肉に眼がないからな、おれがやつつけたんだから、両足くらい寄越せつちゅうかもしれん」

「足は筋肉だから、どちらかというところ固いですよ。焼いて食うには脂の入った脇腹の肉がうまいですが、刺身にするなら背中肉が極上です」

「そんなもんですか。やっぱり野々川さんに来てもらってよかったです」

新井は浮き浮きしてきて、座席の背もたれへ体をバウンドさせながら言った。

道路の両側はしだいに草原になり、人家が見当たらなくなってきた。陽が落ちた西空に青みが残っているだけで、地上は刻々暗くなつていく。川とも沼沢ともつかない水面に架かる橋を渡ったとき、

「そろそろだぞ。あとはゆっくり行け」と新井が指示した。慎二は、エンジン・ブレーキを効かせて、速度を落とした。後ろの座席の者も、首を伸ばして前方を注目した。

フレームに仕切られたフロント・ガラスの中央を、遠い山脈に向かつてアスファルトの道路が貫通している。それは正確な遠近法によつてとてつもない奥行きを表わしていた。見はるかす彼方まで海原のような草原で、黒く櫛比する針葉樹林が帯状に連なり、それらが薄暮の青みをおびて広大な一枚の絵になつていた。

しかし、車内の男たちは誰一人、その自然が描いた絵画を鑑賞するゆとりなどなかつた。

「左側の道端に寄せといたつちゆうから、足が見えるかもしれんぞ」

「道路でぶつかったんなら、血の跡があるんでないか」

みんな眼が血走つてきた。やがて道路脇に〈ヘスリップ注意〉の黄色い標識が見えた。木村の言っていた目印だった。運転はほとんど徐行になつた。センターラインの近くに水溜まりのようなものが見えた。

「あれ、血の跡でないか」と何人かが同時に言った。慎二はブレーキを踏んだ。

いつせいにワゴンを下りた。血の跡は特大のピザパイほどの大きさだった。真っ先に飛び出していった森谷が覗きこむようにしてから、足先で踏んでみた。そして、

「わっ、牛の糞だぞ、こりゃあ」そう言つて、飛び上がったので、

後続く者は動きをとめ、それから大笑いになった。

「ひでえよ、畜生！」

森谷は草むらに靴底を何度も擦りつけてぼやいた。他の者たちはまだ笑い続けた。

牛の糞はそれから何力所かあったが、それでもまもなく、道路の中央に、堆積物のないただ濡れただけの跡を発見した。それは倒れた人間ほどの面積があり、すでに黒く凝固していた。周辺にガラスの破片も散らばっている。

「間違いない。ここだ！」

新井は獲物を追いつめた犬みたいに叫んだ。

「引っ張ってつたのはこっちか！」

森谷の声が終わらぬうちに、新井は道端へ跳んで行った。血の跡は道端まで断続して繋がっており、密生した雑草がそこだけ踏みつけたように倒れていた。

「ここだな、絶対ここだ」

「ここであることは確かだけどよ……」

肝心の鹿の姿が見えなかった。道路の斜面やその下の小川が流れている辺りも探したが、見当たらない。

「どこへ行っちゃったんだ」

「誰かが横取りしやがったな」

「ありうることだ」

「脳震盪のうしんとうおこしただけで、また眼が覚めて逃げたかもしれないよ」「いや、この血の量からいけば相当な深手だぞ」

「案外、その辺に倒れてたりして」

四人は斜面を下り小川を跳び越えて、草原へ眼を凝らした。しかし、山裾から忍び寄る夜気が黒い靄のように視界をさえぎり、遠くまで見通すことができなかった。

「もっと向こうへ行ってみるか」

「いや、こっちかもしれんど。生き返ったとしたら、元きた道を帰るかもしれん」

もう一度、道路へ戻り、反対側の針葉樹林へ向かった。十数メートルもあるエゾマツが林立する樹間には獣がひそんでいる気配があつたが、草原よりもっと暗く、てんでの顔すら判別できないほどだった。慎二がワゴンのヘッドライトを点け、車体を斜めにしたたり横にしたりして森林のなかを照らした。けつきよく、それも足掻きにすぎなかつた。

「畜生！ どこへ行つちまつたんだ」

森谷の怒鳴る声が森中に響いた。

みんなはまた道路へ上がった。ズボンや靴が雑草の花粉で汚れ、疲労感を募らせた。ワゴンのライトに細かい虫が無数に群がり、狂つたように乱舞していた。

夕闇の遠くに赤い光が浮き出るように現われ、チカチカ瞬いた。それが眼を射ながら見る見る近づいて来る。近づくにつれ、二つのライトの上に赤い回転灯が点滅しているのだとわかり、みんな緊張した。パトカーに違いなかつた。

パトカーは通り過ぎるのではなく、眼の前に急停車した。運転席の窓が開き、警官が顔を出した。

「ここで何をしてるんです」

「いや、別に……」

一番近い位置にいた新井は口ごもつた。不意だったので、うろたえた感じになった。ほとんど同時にパトカーの両側のドアが開き、二人の警官が道路へ下りた。運転していた若い警官が近づきながら言った。

「何かあつたんですか、みんな揃つて」

「あの、それは、……急に小便がしたくなつたもんで」

「君は酒を飲んでるね、酒気帯びで運転していいと思ってるのかい」

新井の鼻先で、警官は手帳を出した。

「ち、違いますよ。運転は弟がやっていて、奴は飲んでいません」
もう一人の年配らしい肥った警官は、ワゴンに近づき懐中電灯を点けた。丸い明かりがバンパーの辺りを照らしている。

「免許証を見せてもらえますか」と若い警官が言った。

慎二がワゴンのグローブ・ボックスから免許証を出すと、警官は万年筆型の豆電灯で照らして見て、手帳に何やらメモした。慎二は口を尖らして「おれ、何もやってないけど、何かあったんすか」と聞いた。しかし、警官はそれに答えず「みんなどこから来ましたか」と尋問口調で言った。

「……士別から」

慎二がぶつきらぼうに答えた。

「何時に士別を出しました？」

「七時ころだったかな」

「間違いないですか」

「間違いないっすよ、そんなに疑うんだったら家に電話してみりゃあいい」

「で、ずーつとこの道を来たんですか」

「そうっすよ」

「これから、どこへ行くんです？」

「それは……」

慎二は言葉に詰まって、横にいる兄を促した。新井も戸惑った。木村の電話のことや、来てみたら鹿が居なかったなどと話すわけにはいかなかった。

「え？ どこへ行くの」

「……び、美深ですよ。釣りに行く打ち合わせで」

新井はとっさに嘘を言った。

「どうも、君たちなんだか落ち着きがないね」

「そんな言い方はないべさ、おれたちはただ小便したくなつてクルマを停めたただけだよ」森谷が怒った口のきき方をした。

懐中電灯の丸い輪がまだワゴンの足回りを移動して、ときどき止まったりする。何か念入りに調べているようだった。新井はダッシュボードの上へ置いた出刃包丁に感づかれるのでないかと気が気でなかった。新聞紙を巻いてあるが、走っている間に刃先が出たかもしれない。

年配の警官が若い警官に近づいた。二人で何事か小声で話した。若い警官が「車検証も見せてもらおうかな」とまた指示した。

「やれやれ」と慎二がぼやき、ワゴンのドアを開けた。新井は、慎二が気をきかして包丁をグローブ・ボックスに仕舞えばいいのに、と思つたが、弟にそんな素振りは見えなかった。

「いったい、何があつたんですか」

新井は警官の注意をこつちへ向けるように尋ねた。若い警官は車検証を見て、まだメモをとっていた。

「ちよつとした事件がありましたね」と年配の警官が愛想のいい声で言つて、懐中電灯を消した。

「何の事件ですか」

森谷が勢いこんで聞いたが、それ以上は教えてくれなかった。

「失礼しました」と若い警官は車検証を返しながら敬礼した。年配の警官も「ご協力ありがとうございます」と言つて敬礼した。

パトカーは美深の方向へ走り去つた。四人は事態がわからないままに取り残され、ワゴンに乗りこんだ。ダッシュボードの上の出刃包丁は新聞紙に巻いたままで、刃先は出ていなかった。新井はそれをグローブ・ボックスへ仕舞いこんだ。

「しょうがない帰るべ」

森谷は気落ちした声で言った。

「警官に言ったのと行き先が違うことになるな」と新井は。パトカーが去って行った方角を見て言った。

「かと言って、用もないのに美深まで行くこともないべ」

「パトカーは向こうへ行っただ、戻ってなんか来ないよ」

「そうだ、鹿は居ねえし、もうさっさと帰ろうや」

多数決に従って慎二はワゴンの向きをターンさせた。ワゴンはぎくしゃく動き、みんなはそのたびに体を前後左右に揺すられ、のけぞった。なんだか慌てて雑な運転になっているようだった。

空に星が瞬き、すっかり夜だった。道路のアスファルト面は濃い闇のなかにあり、センターラインだけが白く断続していた。

「ああ、あきらめきれねえ」と新井が溜め息をついた。

「ついてないですねえ」と野々川が相槌あいづちを打った。「それにしてもあのパトカー、何だったんでしょうね」

会話がちつとも盛り上がらなかった。四人とも、来るときの騒ぎようとは別人みたいに沈みこんでいた。

名寄の市街の辺りまで戻ると道路が十字路になった。コースをはずしたほうがさっきのパトカーに出会う確率は少ないとの野々川の意見で、右折して市街へ入った。曲がるとき、スピードをじゆうぶん落とさなかったのでタイヤが鳴った。踏み切りを渡るとネオン街が見えた。

「おい、どうだ」と森谷が言った。「ちよつと寄って行くべや、このまま帰ったんじゃ気分が収まらねえ」

「そうだな、軽くやって行くか」と新井も賛同した。

「よし、そうと決まれば、可愛い子ちゃんのいるところがいいな」森谷は急に元気づいた声で言った。

「いらっしやいませえ」

ママがカウンターの向こうで顔を斜めにして微笑んだ。ウェーブの長い髪が美しい女で、みんな惹かれるようにドアを入った。客は誰もおらず、中央のボックスに深々と腰をかけた。冷房が効いていて気持ちよかった。新井は体中が汗まみれなのに、いまさらのように気づいた。森谷がビールを注文した。慎二は運転のためトマトジュースにした。

「お客さん、どこから来たの」

若いホステスがおしぼりを渡しながら聞いた。小さくで厚い唇は愛らしいが、感情を失ったみたいに無表情だった。

「あっちから」と慎二は答えた。

「それで、どこへ行くの」

「こっちへ」

「いやあねえ、言えない理由でもあるの」

「そうだ、もう尋問は真っ平だよ。おれたち逃亡中なんだから」

「あのさあ」とホステスは四人の顔を探るように見ながら言った。

「あんたたち、まさか轢き逃げ犯人でないよねえ」

「……なんだって」

「何いうのピーちゃん、失礼よ」とママがホステスをたしなめた。

「事故があつたのかい」

新井が訝しげに尋ねた。

「知らないの。さつき市街で轢き逃げがあつたのよ、女の人が撥ねられて、病院に行く前に亡くなつたって」

ピーちゃんと呼ばれた女は抑揚のない声で説明した。新井は一瞬、頭のなかが混乱して、木村が撥ねたのは鹿ではなくて人間だったのか、と考えたりした。

「犯人は捕まってるのかい」

「ええ、目撃者の話ではね、轢いたクルマは黒いワゴン、運転していたのは四十二、三歳の男ですって」

ママが突き出しの小鉢を運びながら言った。

「おいしい、冗談じゃねえよ」

「道理でしつこいと思った。あの警官」

ママとピーちゃんが男たちのグラスにビールを注いだ。

「それじゃあ、幻の鹿へ乾杯」と野々川が冗談めかした声で言ったが、誰も唱和する者はいなかった。みんな浮かぬ顔のまま一息に飲んだ。

「え、鹿？ 鹿ってなあに」

ピーちゃんが興味を示した。

「もう、話すの面倒くせえよ」

慎二がトマトジュースをストローで啜りながら言った。

「聞きたいな、その話」

「よし、おれが話しちやるから、おれのそばへ来い」と森谷が言った。彼女は慎二の前を跨いで、森谷の横へ坐った。

「あのな、このなかに一人だけ独身がいる。誰だと思う」

ピーちゃんの顔に自分の額がくつつくほど近づけて、森谷が話し始めた。彼は妻と別れてから、女と見れば物欲しそうな態度が出る。それも若い女への関心が強いのだった。ピーちゃんは相変わらず無表情のまま聞いていた。

ドアが開いて、若者が三人入って来た。ママは「いらっしやいませえ」と華やいだ声をあげ、香水の匂いを残して立って行った。若者たちはカウンターに座を占めた。何か浮ついた感じで、それぞれがやかましい声を出した。急に店の雰囲気が変わってしまったようだった。

「ピーちゃん、お晩です」と若者の一人が言った。

「はい」と彼女が手を上げた。森谷は顔をねじって若者たちを見、不快さを露わにした。森谷の顔色を見てとった新井の頬に苦

笑が浮かんだ。

「おれのバーボン出してよ」

「野菜サラダが食べたいな」

「ママ、今夜も魅力的」

「。ピーちゃん、こっちへ来ないかな」

若者たちはこの店の常連らしく、わがもの顔にはしゃぎまくっていた。世界は自分たちを中心に回っているとでも思っているようだった。

「いやあ、びっくりしちゃったなあ、眼が二つ光ってて。犬かと思ったら角があるんだも」と短い足にジーンパンを履いた若者が甲高い声で言った。

「けっこうでかい奴だったな。それでもさすが野生動物だ、動きが素早いわ」

髪をパンチパーマにした若者が低い声で言った。

ボックスの中年たちはみな聞き耳を立てた。森谷が身を起こし、「き、君ら、鹿を見たのか」と勢いこんで聞いた。若者たちは振り向いた。どの顔も見知らぬ者を拒んでいるようだった。

「なっつてば、鹿を見たんだべ」

森谷は苛立った声を出した。

「……そうだけど、それが何か」

パンチパーマの若者が言った。眉間を締めつけて威圧する眼つきをしていた。

「そ、そいつをどうした」

「どうもしないよ、そのまま逃げて行ったんだから」

「逃げた？ で、その鹿、怪我してなかったか」

「……………」

「そうそう、頭かどっかから血を出していなかったかい」

野々川はやんわりした物言いで聞いた。

「……いや、別に」

パンチパーマは「な」と言つて、隣の席の、女と見まがうほど白い肌の若者に聞いた。

「うん、そんなふうには見えんかった。道路の真ん中に立ち止まつて、一瞬こつち見てから、サツと逃げて行っちゃったですから」「それ、どこら辺で会つたの。北のはずれ？」

「いや東のほうです。ピヤシリ川の橋の近く」

「……なあんだ、それを先に言えよ」

新井は腹立たしい気分になつて言つた。木村が撥ねた地点とは方角がまるで違う、それに二〇キロ以上も離れている。

「このごろ鹿があちこちに出てるみたい。うちの近くの農家でもニンジン畑がやられたばかりです」と色白の若者が言つた。

「また繁殖してきたのかな。狼や野犬がいなくなつて、鹿の天下になつたのかもしれないねえ」と野々川が言つた。

「おじさんら、何さ。その怪我した鹿を追つてるんかい」とパンチパーマの若者が眉間をゆるめるようにして聞いた。

「おお、欲の皮突つ張つてバカみたさ」

森谷が笑いながら答えた。

それから若者たちは、森谷や野々川が勧めるビールを遠慮がちに飲み、しだいに打ち解けておしゃべりを交わした。

テーブルの上はいつかビールから焼酎に変わった。空きつ腹にアルコールが効いたのだらう、新井はしたたかに酩酊した。他の仲間たちも同じ状態らしかった。ボックスの端でトマトジュースをお代わりしている慎二だけが、覚めた顔をしていた。

「面白くもねえ日だぜ、まったく」

首を落として新井が嘆息した。

「何が面白くないの、もっと飲んだら楽しくなるわよ」

ママが横で言つた。涼やかな声が男心を誘うように響いた。

「今からどんな楽しみがあるんだい」

「いやあよ、私、暗示に弱いんだから」

ママが体を新井に押しつけ、彼は腕を回した。細身の腰の下は意外に肉づきがよかった。しかし欲望は膨れあがらず、体は重い疲労感にとらわれたままだった。ソファの背もたれに頭を乗せ眼をつぶった新井は、また一日が無為に消えていく、と思った。

「……おれ、誠意ってもんは分かり合えるって思うんです」

低い声がカウンターのほうから聞こえた。会話の中身はわからないが、パンチパーマの声だ。すると、

「ばかやろ、現実の人間関係ってもんはそんな甘くはねえよ」と森谷の知ったふうな声が重なった。

「男ってもんはな、常に自分の生きる何かを示していないといかん、それがないとナメられちゃうんだよ。それこそあの鹿の角のようなもの、大きくて立派な何かを高く掲げておかんならんだ」

「あ、それうまい譬え^{たと}っすね、ステータスシンボルっちゅうか」

「やっぱり鹿同士はあの角の大きさを見て、あいつ強いとか弱いとか判断するんかなあ」

「鹿の尻の白い毛は、危険を知らせるためだと聞いたことがあるな。敵に追われたとき、子鹿なんか夜でも母親の白い尻について走れば見失わないって」

誰の声かわからない、しだいにテープレコーダーを遅回ししたようにくぐもって聞こえる。

「子鹿って可愛いわよねえ」

これはピーちゃんの声。

「その目印、^{おす}牡にとっては交尾の相手として認識するんでないかね。白いお尻に欲情したりして」

野々川の引きつった笑い声が混じった。

「わお」

「ああ、おれも繁殖したい」

切なそうな声を出したのは短い足の若者か。みんな勝手放題にしゃべりまくり、脈絡がなかった。

ふいに新井の胸に悲哀が湧いた。朦朧もうろうとする意識の底で幻影を見たのだ。それは夜の草原を駆けて行く一頭の牡鹿おしかだった。誇示すべき二本の枝角は根元からもぎれ落ち、傷口から柔毛を伝って血が流れていた。よろめくたびにか細い足を踏み張り、頭をもたげてひたすら闇に向かうかのようにだった。

底本…『われらリフター』 近代文藝社 一九九三年三月二〇日発行（絶版）